

縣由衣子(慶應義塾大学)

本発表ではミシェル・セールの第三項概念について論じる。2019年の逝去以来、セールの研究は本格的なものになりつつあるが、その先行研究ではセールの膨大な著作の中の具体的な諸テーマについて論じられていることが多く、その思想の方法論についてはまだ研究が十分にされていない状況にある。本発表で中心的に論じる第三項 tiers 概念は、セールにおいては、同者でも他者でもないものとして定義される。このことは一見、論理学における排中律 tiers exclu を想起させるが、セールはこの概念でより広いものを指し示そうとしていると言える。本発表の仮説は、セールの思想においては、この概念はその思想の中核をなすものであり、この第三項が複数あるとすることがセールの哲学的方法論の一つの根幹をなしているというものである。その上でまずセールの最初期の論文集である『ヘルメス』の第一巻『コミュニケーション』に収録されている論考を中心に検討していく。

第三項概念を論じる上で重要なのはセールがその思想の最初期で提示している「網の目のネットワークモデル」である。まずはこの網の目のネットワークとは何か。「構造と輸入—数学から神話へ」²においてセールはロマン主義的な文化批評を批判し、それを脱却するものとして構造概念による分析を提示する。ロマン主義的な象徴分析が常に回帰的な性格を帯びてしまうことがその批判の主眼であり、文化批評を通じて新たな生成を行う道具立てとして構造分析が導入される。この構造分析では、意味を持たない構造の形式によって文化的内容を構造のモデルとして読み取ることが試みられる。象徴分析においては分析対象の意味は象徴と一義的に結び付けられるものとなってしまう、分析対象が象徴の意味に回収されてしまうのに対し、構造分析においては、文化的対象は様々な構造との複数の関係によってさまざまにモデル化されることが可能になる。つまり複数の構造との複数の関係が成立し得るのである。最終的には構造に意味付与を行うことによって、文化的な対象を再構築することすら可能である、とセールはしている。

この時、構造概念は意味作用が定められていない操作的な集合であり内容が特定されていない任意の個数の要素と性質が特定されていない有限個の関係をまとめたものと定義される。「コミュニケーションの網の目」³においてセールはこのモデル概念を前提として弁証法的な文化批評の方法論的問題点を指摘する。つまり要素と関係という観点から、弁証法的批評は方法論として分析される。その問題点は大きく分けて2つある。①ある定立されたテーゼから他のテーゼと結ばれる関係が1つしか提示されていない。②また常に全体の概念が動員されることから、全体と部分とを分けて論じることが不可能であり部分相互の関係について論じることが困難である。

このことに対しセールはグラフ理論を援用して構築されたネットワークモデルを提示する複数の要素があるいは頂点が複数の

関係により、重層的に取り結ばれることが可視化されるこのモデルによって弁証法の単線的なモデルが一般化可能だとしている。

本発表で言及する第三項概念はこの網の目のモデルの頂点の一つとして概念化されている。では第三項とは何なのだろうか。それは主体と客体の二項対立に対して提示される第三者である。セールにおいてはむしろこの第三者が一般的にある集合を形作り、関係や観察者が立脚する視点によって主体あるいは客体として特殊化されるのである。そして先程述べたように、セールはこの集合と言う全体における部分相互の関係を考察することが可能なモデルを、網の目のネットワークによって提示したのであった。したがって、全体から分離可能な複数ある第三項相互の関係がセールにおいて考察することが可能になるわけである。その上で、勿論ライブニッツの影響のもとにあるセール思想において、モノイドにおける実体間の交通の問題と、この部分としての第三項についても比較して検討する必要がある。

また、重要な事は、セールにおいてはこのような複数性あるいは多数である事が、多の問題と区別されて提示されているという点である。第三項は、複数存在するがそれぞれが分離可能である程度の自律性を持った相互に関係を取り結ぶ部分である。この複数の第三項は、カオス的な混雑した多とは異なる。したがって第三項の複数性あるいは多数性はいわゆる一と多の問題とは区別して論じられるべきである。このような複数の第三項は、ある視点からでは主体となり、またある視点からでは客体となる。そしてまたある視点からではこの主体と客体の関係の妨害者として排除され、ときには媒介しするのである。これらの関係が一つの頂点である第三項の中に重層化されるものとして論じられることによって、セールはロマン主義的な一義的意味付与からも、弁証法的な全体の動員からも離れたものとして、部分相互の関係を論じる事を可能にしようとする。それが、最も複雑な現実を分析する上での哲学的な道具立てだとセールは考えるのであり、また新たな文化的生成にも寄与するものであるとしている。

言い換えると、セールはこのように全体と部分の問題と主体と客体との問題を第三項概念を介して接続する。主体と客体の硬直的な二項対立概念はこのように網の目のネットワークの中に読み込まれることによって、複数化し増殖する。この網の目のネットワークのどこに立脚するかにより、複数ある第三項のどれかが主体となり客体となり関係を取り結ぶのである。後年、『パラジット』で論じられる寄食者の論理や、『ローマ』で論じられる権力の中心であると同時に排除対象である王の例は、ここに示される網の目のネットワークモデルにおける複数の第三項の具現化の一例として理解することが可能になるのではないだろうか。

¹ Michel Serres, *Hermès I, La communication*, Paris, Minuit, 1969.

² Michel Serres, « Analyse symbolique et méthode structurale », *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, tome157, Paris, P.U.F.,1967, pp.437-452.

³ Michel Serres, « Le réseau de communication : Pénélope »,

Revue Philosophique de la France et de l'Étranger, tome156, Paris, P.U.F.,1966, pp.41-51.

⁴ Michel Serres, *Le Parasite*, Paris, Grasset, 1980.

⁵ Michel Serres, *Rome Le livre des fondations*, Paris, Grasset, 1983